命の器

宮本 輝

命の器
宮本 輝
© Teru Miyamoto 1986
1986年10月15日第1刷発行
1989年10月30日第8刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版———豊国印刷株式会社
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。 (庫)

ISBN4-06-183857-1

講談社文庫

命の器

宮本 輝

講談社

命の器（いのちのうつわ）　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

吹雪　一三
父がくれたもの　一七
わが心の雪　二一
大地　二四
東京は嫌い　二六
雨の日に思う　二三
かぐや姫の「神田川」　二六
正月競馬　二七
改札口　四一

十冊の文庫本　四六
精神の金庫　四九
蟻のストマイ　五一
命の器　五三
馬を持つ夢　五五

II
街の中の寺　五九
私の愛した犬たち　七二
「内なる女」と性　七七

南紀の海岸線　九〇
貧しい口元　九三
潮音風声　九五

III

アラマサヒト氏からの電報　一二五
成長しつづけた作家　一二九
坂上楠生さんの新しさ　一三五
「川」三部作を終えて　一三七
芥川賞と私　一四一

命の力　一四五
「泥の河」の風景　一五〇
「泥の河」の映画化　一五三
小栗康平氏のこと　一五六
「道頓堀川」の映画化　一五九
私の「優駿」と東京優駿（ダービー）　一六一
「風の王」に魅せられて　一六六
錦繡の日々　一七〇
あとがき　一七五
宮本輝さんの仕事　水上　勉　一七七

本書は昭和五十八年十月
小社より刊行されました。

命の器

いのちうつわ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

吹雪

列車は停まったままだった。もう一時間近く、北陸の雪原の中に閉じ込められて、いっこうに動きだそうとしなかった。あんなにもすさまじい雪は、あとにもさきにも、二十五年前の、大阪から富山に向かう立山一号の満員の車内の窓から見たもの以外、一度もない。

「これが、吹雪というやつや」

と父が教えてくれた。座席には、十歳の私と、父と母、それに見知らぬ鳥打ち帽の男が一緒だった。男は大きな旅行鞄を通路側に置き、その上にウィスキーの壜やら地図やら手帳やらを乗せて、ときおりその脂ぎった赤い顔を私に向けた。愛想笑いひとつ浮かべず、私を見つめる男が気味悪く、私はきっとこの人は悪い人なのだと思った。大きな旅行鞄が、通路を歩く人の邪魔になっていることなどまったく意に介さず、ウィスキーを呑み、カマボコを食べている。外は一メートル先が見えないほどの吹雪である。

それまでひとことも発しなかった男が、突然口を開いた。

「このぶんやと、着くのはあしたの朝になるかもしれまへんなァ」

あしたになろうがあさってになろうが、どうでもいい。そんな言い方であった。

「月に二、三回、富山へ行きますが、こんな雪は初めてですなァ」

父は黙っていた。男の言葉に何の返答もせず、煙草を喫っていた。それで私は、父もこの男を悪い人だと思っているのに違いないと考えた。父は口髭をはやし、太い眉と切れ長の目をしていた。父が本気で怒って睨みつけると、たいていのチンピラは怖気づいた。私たちはすべてを売り払い、知人を頼って富山に新天地を求めるべく、立山一号に乗ったのである。

「どうです、一杯。悪い酒やおまへんで」

男は父にウィスキーのキャップを差し出した。父はことわったが男はしつこくすすめた。

「わしは、酒はやらんのじゃ。酒の匂いを嗅ぐだけで胸が悪うなるけん、どこか他の席に移ってくれ」

父は煙草のけむりを男の顔に吹きかけてそう言った。母が怯えた顔で父を見ていた。父は寝起きに一杯、昼にも一杯、夜には腰をすえて一升酒という酒豪であった。男は少したじろいだようだった。満員で、通路には席を取れなかった人たちが新聞紙を敷いて坐り込んでいる状態だったから、他の席に移れと言ったのは、父がはっきり男にケンカを売ったのと同じだった。だがそういうタンカを吐くときの父の顔には、一種泰然たる風格と気迫がみなぎっていた。

「そないムキにならんでも……」
男は作り笑いを浮かべ、
「大将、伊予のお方でっか」
と訊いた。愛媛県の南宇和郡出身の父は、死ぬまでいなか言葉を使った。男は居心地が悪そうに体を通路側にねじり、父に背を向ける格好で地図をひろげた。
「ほんまに、あしたまでに着けへんのん？」
私は心配になって父に訊いた。
「春になったら着くけん、安心しちょれ」
父は笑い、それから腕を組んで目を閉じた。こんどは男は私に話しかけてきた。ひろげた地図を見せ、
「ぼくは、どこへ行きはるんや」
と訊いた。
「知らん」
私は目を閉じている父を窺いながらそう答えた。
「おっちゃんにもなァ、あんたぐらいの子供がおるんや。女の子やけどなァ」
だが不愛想な親子にこれ以上かかわっているのは面倒だと思ったのであろう。男は人々の間を縫って便所へ行き、帰って来ると、そのまま眠ってしまった。私はスチームの熱で火照る頬を窓

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com